

「人を大切に」 1店舗1人の障害者雇用を

—株式会社フレッセイ—

職場
ルポ

EMPLOYEE
SHOP
REPORT



(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



株式会社フレッセイ

〒379-2198 群馬県前橋市力丸町900-1

TEL 027-265-3111 (代表) FAX 027-265-4892

URL <http://www.fressay.co.jp>

江戸時代に創業、 地域のスーパーとして発展

前橋市の南、高崎駅と伊勢崎駅のほぼ中間に、群馬県内でスーパーマーケットを展開する「株式会社フレッセイ」の本部がある。関越自動車道から分かれた北関東自動車道の前橋南インターの近くだ。

創業は、江戸時代末期の嘉永三年。海のない群馬の人たちにおいしい魚を食べてもらいたいと、鮮魚・塩干物の卸小売業「松葉屋」として商いを始め、戦後に株式会社「松清本店」に、その後、北関東で初めてスーパーマーケットをオープン。一九九二年にCIを導入し、社名を株式会社フレッセイと変更した。フレッセイでは「一店舗、一人の障害者を」という方針を掲げて、障害者雇用に取り組んでいる。



藤田友三郎 総務部長

本部で、総務部長の藤田友三郎さんにお話をうかがった。

「フレッセイの社名には、フレッシユ+セイ、新鮮さと誠実さでお客様のニーズに応えたいという思いを表し、ロゴマークの赤・緑・ブルーは、生命の源である太陽・大地・水を表しています。『人を大切にする』を行動規範に、地域生活者のパートナーとして、幸福で健康的な暮らしの発展に貢献したいと考えています」

従業員は、社員・パートナー社員・アルバイトを含めて約三八〇〇人。常用雇用労働者は約一五〇〇人。群馬県内に四二店舗。埼玉に一店舗、栃木に二店舗のほか、百円ショップの「ダイソー」のフランチャイズを展開している。



栗原敦子 総務部人事マネジャー

人件費は本部も負担、 採用は各店舗で

障害者雇用には積極的に取り組み始めたのは、フレッセイと社名を変更した数年後からだ。

「人を大切にとつたついでに、障害者雇用に対する理解がかなり不足していたことがありました。店舗作業は、荷おろしなどの力仕事や売場の商品補充、商品作り等が多いので、健常者でもハードなところがありますし、受け入れの作業環境が整っていませんでした。なかなか雇用率が上がりませんでした」

ハローワークなどから、「障害者雇用を」との働きかけもあった。とはいえ、お店は効率が第一。そこで、障害者を採用した場合、本部でも人件費を負担することにした。

「社会的な責任を果たしていかなければいけないという社内のコンセンサスはありました。店長は、数字を任せられていますから、作業効率を重視します。作業効率が落ちる人は採用したくないというのが本音だと思います。人件費は原則として本部と折半するようにして、店舗で採用しやすいようにしました」

知的障害者の雇用は一九九六年から。養護学校の卒業生が一度に四人入社した年もあった。



真下聖和境町店長



篠沢光弘大胡店長

「養護学校からの職場実習を大勢受け入れて、その中から採用をする体制をつくりましたので、雇用率が一気に上がりました。新規開店の店舗は、ハードビル法に沿って、身体障害者やお年寄りにやさしい店になっていますので、作業場や食堂など、バックヤードの機能も充実させてきました」

養護学校からの就職は、職場実習を受け入れ、本部でどの店舗なら通えるかを

確かめ、いくつかピックアップした中から受け入れ可能なところに依頼し、採用は各店舗で行っている。

「採用は、店長の裁量です。会社の姿勢として、障害者雇用に協力してほしいという話をしていますが、店長に特別な働きかけはしていません」

今日、障害者雇用率は三パーセントを超え、知的障害者一五人、聴覚障害者五人、肢体不自由五人、内部障害者一人の二六人が各店舗で働いている。身体障害者の仕事は、健常者とほとんど変わらない。

「聴覚障害の人とは一生懸命に手話を覚えて会話をするとか、筆談するとか、一人にしないで食事と一緒にとか、コミュニケーションをいかにとっていかか、みなさんが努力してくれました。障害者でも健常者でも、同じ働く仲間なのだから理解されてきたのではないかと思います。」

初めのころは、コミュニケーションがうまくとれなかったと思いますが、お互いが接するうちに、障害者も努力していきますし、学ぶ点もあることがわかって、協力しあうようになっていっていると思います。障害者の定着がいいと言われるのは、現場で接している従業員の意識が変わったことが大きいと思います」

各店では来客用の車いすを備え、盲導犬を受け入れ、チェッカーは、手話で簡

単なあいさつができる。

「障害のあるお客様も大切にしているという姿勢もっています。一円玉募金で、社会福祉協議会などへの車の寄贈を十数年続けているのも、従業員はわかっていると思います。機会あるごとに社内報でアピールしていき、昨年九月に障害者雇用の優良事業所として厚生労働大臣賞を授賞したことも知らせました。そういう啓蒙をすることで、従業員の意識が徐々に変わってきたのではないかと思います」

仕事は 農産物の袋詰めなどから

総務部人事マネジャーの乗原敦子くわはらさんは、一般の定期採用、中途採用、給与、労務関係などの業務の中で、障害者雇用も担当している。

「効率を重視する店舗では、障害者を持つている方も、どうしても同じ目で見えてしまいがちです。健常者ならここまでできるはずだということが、障害者を持つている方はここが精一杯ということがありますから、そこをどう判断するか、店長の力量にかかってくると思います。そのあたりをきちんと理解をして、接して下さいとお願いをしています」

知的障害者は常用雇用のパート採用で、一日六時間勤務が多い。社保などは

完備している。

「知的障害の重度の方は職場実習の段階である程度わかりますから、本部で経費を半分持つようにしています。最近の養護学校経由の方はほとんどが重度ですね」

仕事は、主にバックヤードでの農産物の袋詰め、パッケージ作業など。一般食品の品出しをする人もいる。配置は、各店長の判断に任せている。

「バックヤードでの作業しかできない人もいますし、客前に出ても大丈夫な人もいます。農産物は袋詰めとか単純な作業がありますので、そこから仕事を始めています。農産物以外の作業もできそうな場合は、店長の判断で違う部門につき人もいます」

何か問題があると、店長や営業サイドから総務部に話ぐる。

「いいことはなかなか情報が入ってこないで、クレームが入ってくる人が多いので……」と乗原さん。

これまでには、朝会社に行くと言って家を出て、出社しなかつたり、仕事場で、暴れだしたり……。そのときには、障害者職業センターのカウンセラーや、出身の養護学校の先生に応援してもらった。

「そういうことが、何年かに一度、チラツチラツとありますね。養護学校のアフターケアはほんとに熱心で、頭が下がる思いです。本部での対応には限界があ

りますから、受け入れ側の本当に身近な人たちの理解がすべてだと思います。店長を信頼しているといえ、いい表現ですが、言葉を変えれば、任せっきりになっているところがありますので、今後はできるだけ状況確認をしていきたいと思えます。日々の中ではいろいろなことが発生していると思えますので、めんどろをみてくれている人たちの心の状態もみていきたいと考えています」



あいさつは誰にも負けないという
石井隆之さん



ネクタイを自分で締めて出社する
布川直樹さん

遅刻欠勤なし。 きちんと仕事をこなして

乗原さんとともに、知的障害者一五人を代表して、取材に応じてくれる二人の仕事場へ向かう。

前橋駅の北東、上毛電鉄の大胡駅近くの大胡店では、布川直樹さんが牛乳などの商品の補充や農産物の袋詰めなどの作業をしている。二〇〇二年に入社して、四年目。自宅から離れて、通勤寮から電車で通ってくる。勤務時間は朝八時から午後三時までだ。

店長の篠沢光弘さんの話。

「私が転任してきたときには、すでに基本的な作業はできていました。『元氣かい?』とか、できるだけ会話をするようにしています。遅刻も欠勤もありません。電車が遅れているときには、連絡がきます。出勤時間、掃除の時間などは、誰よりもきちんと守っていますね」

布川さんはまれにてんかんの発作があり、知らない人はびっくりするそう。

「私は前任の店長から『少し横に寝かせておけば落ち着くから』と聞いていましたが、誰も見ていない外で倒れたときは、心配でしたので救急車を呼びました。最近『成人になったのだからとネクタイをしてこい』と言いましたら、練習して自分でできるようになりました。店でい



入社して4年目の布川さん。
遅刻・欠勤はない

ちばん偉いのは、事務の人か、最初厳しく指導してくれたパートさんだと思っ
ているようですよ」

布川さんの話。

「品出しがわからないとき、詰めるものがわからないときは、誰かに聞きます。ちゃんと教えてくれます。仕事には慣れました。忙しいですが、楽しいです」

日ごろわからないことを教えてくれる、まわりの人たちの名が次々とあがる。お店で偉い人は？ と問うと、「みんな偉いです。店長さんは偉いです」との答えが返ってきた。

通勤寮で毎日お金をもらい、お昼は店のパンやおにぎり、惣菜などを買って食べる。

「財布に小銭がたくさんたまってますから、ときどきお札に両替をしてやっています。ヨーグルトや牛乳の品出しでは、日付の確認をして並べています。指示すると、

きちんと仕事をしてくれますね。お母さんに聞くと、だいぶしっかりしてきたと言われます」

店の雰囲気は店長の人柄で大きく変わるそうだが、篠沢店長の布川さんを見守る目があたたかい。大胡店では、聴覚障害者も一人働いている。



ヨーグルトの賞味期限チェック、商品の補充と忙しく働く布川さん

あいさつは抜群、接客も大丈夫

赤城山の広大な裾野を走り、伊勢崎市の境町店へ。生鮮食品をはじめ、生花、銘菓、お酒まで販売する大きな店舗だ。ここでは、石井隆之さんが働いている。布川さんと同じく二〇〇二年に就職した。勤務は朝八時半から午後三時半。食

品担当で、乳製品の品出しから始め、さまざまな作業を行う。売り場に商品を並べながら、接客もする。

店長の真下聖和さんの話。



「私がチーフだったときも、何度か障害のある人たちと接していますので、障害者と一緒に働くのは当たり前だと思っていますが、石井君の場合は店内の作業ができます。お客さんに聞かれても、売りの場の案内とか対応ができますし、楽しんでに仕事をしていますね」

石井さんは最初に勤めていた店が閉店して、境町店に異動してきた。

「あいさつは、誰にも負けません。『おはようございます』『いらっしゃいませ』など、お客様に対してのあいさつは、店いちばんぐらいのレベルだと思えます。一緒に働いている人たちとのトラブルも

WORKSHOP REPORT

なく、誰からも好かれていきます」

店長として、石井さんに気をつけていること。

「気づいたことを一日に何回も報告にきてくれます。店長と同じぐらいの目線で、お店の中のいろいろなことを気づくのが、すごいところですよ。でも、あまりにも気づきすぎて、いっぱいになっていくことがありますから、あまり気にしないで、自分の担当のところをベストを尽くしてやりなさいと話しています」

免許をとり、自分で車を運転して通勤している。ただ、一人での運転はまだ親の「許可」がおりず、助手席にお母さん

が同乗してくる。石井さんの話。

「人と話をするのが好きなので、職場実習をして、先生に勧められました。チームと社員のお名前は覚えたのですが、全員のみなさんのお名前を覚えるのが課題です。話しすぎるのが、玉にキズです。いまの仕事はまだまだ半人前です……」

店内をまわるときも、生き生きと楽しそう。お酒の話題が出ると、「うちの店は、お酒の種類が多くなったので、買いやすいと思います」とさりげなくPR。本人は、缶ビールをコップ一杯しか飲んだことがないそうだが、商売上手だ。

「フレンドリーサービスの接客訓練の



売り場の陳列・品だし、接客に活躍の石井さん



店内で気がついたことがあると、すぐ店長に報告にくる石井さん

マニュアルどおりに、声出しができていますね」と乗原さん。その一生懸命さは、お客様にきつと伝わっているはず。私たちにも、ていねいに見送ってくれた。

最後に今後の障害者雇用について、担当の乗原さんと総務部長の藤田さんの話。

「基本は、一店舗一人を雇用していきましようという方針です。小さな店舗での受け入れはむずかしいので、大きい店舗では二人受け入れているところもあります。いまいる人たちができるだけ長く働いてくれること、健常者と同じ目で見ただけの環境をつくっていききたいと思っています」

「『人を大切にする』は、私たちのスローガンです。共に働く仲間として、障害を持つている方にも差別のない職場を目指しています。トップの姿勢として、障害者を積極的に採用していこうという方針が出ていますので、引き続き雇用をしていこうと思います。また仕事の内容や職種についても、各々の状況をみながらもう少し拡大していきたいと思えます。フレッセイとしては、群馬県を中心に、今後も年に二、三店舗を出店していききたいと考えています」

その新しい店舗にも、当たり前前の光景として、従業員の中に障害者が加わっていることだろう。